

# クリステイーネ・オポライス 来日直前インタビュー

取材・文＝中東生  
Text＝Shinbu Naka

2018年、ローマ歌劇場のブッチェーニ《マノン・レスコー》で初来日したクリステイーネ・オポライスが、ファビオ・ルイジ指揮のNHK交響楽団と、初めてのR・シュトラウス《4つの最後の歌》に挑む。

## 日本でR・シュトラウス《4つの最後の歌》を

### 歌う舞台女優

— 前回の来日では日本をとっても気に入ってくださったようですが、今回この曲を選んだ動機はなんですか。

「正直に言うと、私が選んだのではなく、『イエヌーファ』（ヤナーチェク）や《マノン・レスコー》（ブッチェーニ）などでよく共演しているルイジが、『君の声も成熟してきたから、ちょうどシュトラウスに合うころ

じゃないか?』と誘ってくれたので、とても感謝しています。だんだん新しいレパートリーに挑戦するのが難しくなっていくので……。

— 貴女のような「歌う舞台女優」が、棒立ちでドイツ歌曲を歌うのはむずかしくないですか。

「そうですね、歌曲は知的に、情熱を前面に出さず、声も含めてより多くのコントロールが必要なので、私にとっては挑戦ですが、

歌えるのが楽しみです。役柄に隠れられず、素の自分が出てしまふ点も苦手でした」

夫人》は私にとって特別な役なのです。ブッチェーニがいちばん好きなこともあり、ドレスデンのゼンパーオーパーに「トスカ」（ブッチェーニ《トスカ》）でデビューして来シーズンもオファーをもらったばかりです。ハンブルク州立歌劇場の『イタリア・オペラ週間』でも、前回の『マノン・レスコー』に続いて、今回は『トスカ』を歌います。そんななかで、『蝶々さん』はオペラに登場する役のうちで、いちばん強い女性だと思えます。舞台上で『蝶々さん』の人生を疑似体験して死んでいくのは毎回辛いので、もう歌うのはやめようかと思うほどです（笑）

## 私がいちばん共感できるのが日本でした

Kristine Opolais  
speaks about her Opera roles.



さまざまな話題をふりまくオポライス、それもディーヴァの証か

かの近隣諸国の言語と違ってスラヴ系ではありませんが、もちろんドイツ語に近いわけでもありません。でも、私の母は半分ロシア人で、ギリシャやポーランドの血も混ざっているからか、私はすべての言語や文化を、カンで理解します。ですからドイツ語はむずかしいですが、自分の感情を託せていると思います」

日本で素のままの自分を表現したい

「そのような、カンでのレヴェルで、私がいちばん共感できるのが日本でした。ラトヴィア文化との共通点も感じますし、デリケートで礼儀正しい人々、完璧にオーガナイズされていて清潔な国土、食文化や自然の美しさなど、すべてに敬意を抱いています。だから『蝶々さん』（ブッチェーニ《蝶々

— バイエルン州立歌劇場での『蝶々さん』は日本人にも共感を呼びました。

「それが私にとってはいちばんの褒め言葉です！ 私は毎回自分のすべてを出し切っているからです。ですから今回も、敬愛する日本で、素のままの自分を表現できるのが楽しみなのです」

### ■公演情報

N響第1932回定期公演B /  
第107回N響オーチャード定期 /  
N響 定期 愛知県芸術劇場シリーズ  
〈日時・会場・問合せ〉▽1月22・23日19時・サントリーホール・N響ガイド03-5793-8161 / ▽25日15時30分・Bunkamura オーチャードホール・Bunkamura チケットセンター03-3477-9999 / ▽26日15時・愛知県芸術劇場コンサートホール・愛知県芸術劇場052-971-5609〈指揮〉ファビオ・ルイジ〈共演〉クリステイーネ・オポライス(S)〈曲目〉ウェーバー「オイリアンテ」序曲、R.シュトラウス《4つの最後の歌》、同《英雄の生涯》